

A Drop of Science

東京工業大学名誉教授

黒川 信重 数論

Nobushige KUROKAWA



1952 年 栃木県生まれ
1975 年 東京工業大学理学部数学科卒業
1977 年 同大学院理工学研究科数学専攻修士課程修了
1978 年 同大学院理工学研究科数学専攻博士後期課程中退,
同大学院理工学研究科助手
1979 年 理学博士(東京工業大学)
1982 年 東京工業大学大学院理工学研究科助教授
1991 年 東京大学助教授
1994 年 東京工業大学大学院理工学研究科教授
2017 年 同定年退職, 名誉教授

数学研究への道：四つの出会い

振り返ってみると、私が数学研究に入ることになったきっかけは、1968年～1971年という短期間に集中して起こった四つの出会いに求めることができる。

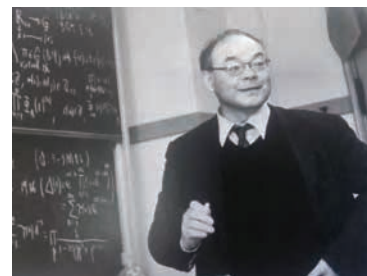
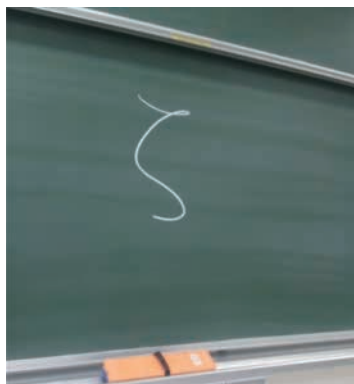
(1) 第一の出会い：1968年（宇都宮高校2年）に同級生の北野実さんと通学列車で一緒になることを通して、数学問題作りに楽しみを覚え、競い合うようになった。彼は当時から素晴らしいラフマニノフ弾きのピアニストだった。ちょうど、月刊誌『大学への数学』で「読者の新作問題コーナー」が新設され、毎月応募し、何度か掲載され味をしめた。そのコーナーは一年間で終わってしまった。親友の北野君は私と一緒に東工大に進学し、音楽の道に入られ、現在も作曲家・ピアニストの倉本裕基として活躍されている。

(2) 第二の出会い：1969年（宇都宮高校3年）に『大学への数学』に上野健爾先生（当時は東大の修士課程）が「二つの予想」という魅力的な記事を書かれた。それは、リーマン予想とラマヌジャン予想という未解決の二大問題を紹介されたものであった。私は、未知なる世界を覗いて、勝手に自分で解こうと思ってしまった。ラマヌジャン予想は数年後に数学の超人グロタンディークの弟子ドリーニュによって解かれてしまったが、リーマン予想は1859年に提出されてから160年経った今も数学最高の未解決問題のままである。

(3) 第三の出会い：1970年（東工大1年）に入学後まもなく、上級生の山下純一さんから、グロタンディークに至る数千年の数学史を本館地下で個人授業をして頂き衝撃を受けた。山下さんは、その頃からグロタンディークを数学的教祖とあがめていて、その後もグロタンディーク研究と数学史研究を続々と発表されて現在に至っておられる。

(4) 第四の出会い：1971年（東工大2年）に菅野恒雄先生の代数学の講義に魅了された。何も持たずに教室に来られて、黒板を数式で埋め尽くし、整然と話された。私は、その格好良さに魅かれて、数学研究の道に入り、卒業研究・大学院と、すっかりお世話になってしまった。菅野先生は2011年3月11日に陸前高田の御自宅にて大津波により亡くなられた。

このような次第で、現在も私は、リーマン予想研究の途上である。月刊誌『現代数学』に連載中の執筆者の中に上野・山下という恩人とともに黒川が並んでいるのは、この上ない喜びである。



黒川信重名誉教授の
研究テーマ：ゼータ